

要 約

利根川水系の田川、大芦川、黒川の3河川でアユの放流試験を実施した。日間成長率は1.79–3.56%で、種苗サイズが小さいほど成長率が高い傾向が見られた。小型種苗は成長率が高いことが確認された一方で、解禁日に十分なサイズまで成長していない事例が確認されたことから、種苗の小型化を進めるにあたっては、あらかじめ解禁日の釣獲サイズを設定し、それに見合った種苗サイズや育成日数を検討する必要があると考えられた。放流後に水温が8°Cを下回った河川では種苗の流下が確認されたことから、放流時期の設定に際しては安定的に8°Cを上回る時期の見極めが重要と考えられた。また、成長率の低い漁場では、成長の良い漁場へ放流を振り向けることも選択肢のひとつと考えられた。

昨年度に引き続き、那珂川水系の上流部及び中流部において解禁当初に釣獲された天然アユの孵化日と体重を比較した。ふ化のピーク時期は両地点共に11月上旬で共通していたが、早期（10月中）にふ化した個体は中流部に定着する個体が多かった。この傾向は昨年度も同様だったことから、那珂川水系での一般的な遡上・定着パターンである可能性が考えられた。また、同時期にふ化した個体でも上流部よりも中流部で釣獲されたアユの方が大型だった。この要因として、相対的に大きな個体が早期に中流域に定着し、安定した水温環境の下、遡上に使うエネルギーを成長に振り向けたことが考えられた。

なお、本課題の詳細については「令和3年度環境収容力推定手法開発事業報告書」において水産庁へ報告した。

（指導環境室）